

東京大学大学院農学生命科学研究所 水圈生物科学専攻

Department of Aquatic Bioscience
Graduate School of Agricultural and Life Sciences
The University of Tokyo

■ 本郷キャンパス

〒113-8657 東京都文京区弥生1丁目1番1号
TEL (03)5841-5275 FAX(03)5841-8168
地下鉄千代田線根津駅から徒歩8分
地下鉄南北線東大前駅から徒歩1分

■ 水産実験所

〒431-0214 静岡県浜松市中央区舞阪町弁天島2971-4
TEL (053)592-2821 FAX(053)592-2822
JR東海道線弁天島駅から徒歩15分

■ 大気海洋研究所

〒277-8564 千葉県柏市柏の葉5-1-5
TEL (04) 7136-6006 FAX (04) 7136-6039
つくばエクスプレス柏の葉キャンパス駅から路線バス8分(シャトルバス6分)
JR / 東武線柏駅からバス25分

水圏生物科学専攻へようこそ

水圏とは、海洋、大気、雪氷、陸水圏を「水」という分子が循環するシステムであり、地球の生命を育む最も重要な基盤です。光合成を行う生物が誕生して酸素を放し始めたのが27億年前、大気中に酸素が蓄積してオゾン層が形成され、有害な紫外線が遮られることで陸上に生物が進出したのが4~5億年前と考えられています。すなわち、生命の進化は海洋で始まり、長い間生命は海洋で育まれてきました。まさに海洋は生命の“ゆりかご”なのです。現在でも、海洋と陸水を含む水圏にはほぼすべての門に属する動物が生息しており、多様な環境に適応しています。水の惑星たる地球の海には潮間帯から深海底、沿岸から外洋、熱帯域から極域に至るまでの多様で変化に富む環境があります。これら多様な環境に棲む多様な生物は、魅力的な研究対象であるとともに、食料として、医薬品を含む生理活性物質や有用遺伝子資源として、地球環境の恒常性を維持する調整役として、さらには信仰や娯楽の場として、我々の生活に多くの恵みをもたらしています。

日本は四方を海に囲まれ、世界第6位の排他的経済水域を持つ海洋国です。日本人は、必然的に海と密接な関係を持って生きてきました。しかし一方で、水中ほどアクセスの悪い場所はありません。干潟やごく浅海を除いて、生物採集するためには船舶が必要であり、直接生物を観察することも容易ではありません。サンゴ礁や浅海域の観察に今では一般的になったスクubaダイビングが開発されたのは1950年代であり、有人深海潜水艇が開発され、深海底で熱水生態系が発見されたのは1970年代のことです。だからこそ、水圏は未解明な現象に富む研究フロンティアとして我々を魅了し続けるのだと思います。

今、この海に大きな環境変化が起こっています。20世紀の大量消費社会は豊かな生活を実現しましたが、その一方で、地球温暖化、海洋酸性化、海洋汚染、資源破壊といった人類の存続に係わる問題を生み出しました。46億年の地球史の産物である海洋環境とそこに生息する生物を守るのは我々の責任だと思います。また一方で、海洋を賢く使うこと(wise use)なくしては、我々の生活や社会を維持していくことは難しいでしょう。

水圏生物科学専攻は、このような時代に求められる水圏のエキスパートを育てる目標を目標にしています。それに相応しい資質を有するすべての皆さんに門戸を開き、広い視野と高度の専門的知識や理解力、洞察力、実践力、想像力を兼ね備え、かつ、国際性と開拓者精神を持った、指導的人格を養成することを目指します。当専攻は、フィールドから遺伝子に至るさまざまな階層を対象に、水圏で繰り広げられる生命現象を総合的に学ぶことができる、本学では唯一の場です。水圏に棲息する生物およびそれをとりまく環境を対象に、(1)分子レベルから個体や集団レベルに至る生命現象、(2)水圏環境および生態系内での物質循環と生物生産、(3)食料資源、生化学資源などの観点からの水圏生物の持続的有効利用、に関する理解を深めるための専門性の高い教員と体系的な教育プログラムを備えています。未来に向けて水圏という人類の生存基盤を確保し、自然との調和を目指すための基礎・応用両面からの研究に、意欲あふれた皆さんの参加をお待ちしています。



沿革

1907年 4月	東京帝国大学農科大学に水産学第一(水産資源学)、同第二(水産増殖学)、同第三(水産物利用学)および水産海洋学の4講座が新設
1910年 4月	水産学科が設立
1911年 4月	水産植物学教室開設
1919年 2月	農科大学を農学部に改称
1923年 8月	水産化学講座開設
1935年 7月	農学部が目黒区駒場から本郷区向ヶ丘弥生町に移転
1936年 7月	愛知県知多郡旭村日長に新舞子水産実験所設立
1937年 12月	愛知県渥美郡泉村伊川津に伊川津水産実験所設立
1941年 4月	水産学第四講座(魚類生理学)開設
1947年 10月	東京帝国大学を東京大学に改称
1962年 4月	東京都中野区に海洋研究所設立
1970年 4月	愛知県新舞子と伊川津の実験所を統合し、静岡県浜名郡舞阪町に水産実験所を移転
1973年 4月	岩手県大槌町に海洋研究所付属大槌臨海研究センター(現国際・地域連携研究センター大槌研究拠点)設立
1995年 4月	水圏生物工学研究室開設
2010年 3月	海洋研究所が千葉県柏市に移転
2010年 4月	海洋研究所が気候システム研究センターと統合し、大気海洋研究所が設立

入学案内

学者受け入れの方針

水圏生物科学専攻では、多様な水圏生物の持続的利用と水圏生態系の保全に関する教育・研究を通じて、人類が抱える食料や環境等のグローバルな課題に対して積極的に貢献できる人材を養成することを目的としています。これらの多様な課題に取り組む専門分野の学習を目指す方、また世界に通用する第一級の専門知識の習得および研究能力の向上に熱意をもって取り組む方を求めています。

学試験

ここでご案内するのは、日本語で実施する入学試験についてです。この他に、英語での入学試験を実施します。詳細については、研究科ホームページ(<https://www.a.u-tokyo.ac.jp/grad/>)をご覧ください。

スケジュール

一般選抜・社会人特別選抜共通です。

課程(定員)	願書配布	願書受付	試験期日	合格発表
修士課程(30名)	4月	6月	8月	8月
博士課程(15名)	4月	11月	2月	2月

修士・博士課程の選抜方法

修士課程

●一般選抜

筆記試験、口述試験、出身学校の学業成績及び提出書類等による。

●社会人特別選抜

筆記試験、口述試験、出身学校の学業成績、事前に提出する研究計画及び提出書類等による。

博士課程

●一般選抜

筆記試験、口述試験、出身学校の学業成績及び修士の学位論文又はこれに代わるもの審査および提出書類等による。試験の免除については募集要項を確認のこと。

●社会人特別選抜

筆記試験、口述試験、出身学校の学業成績、事前に提出する研究計画および提出書類等による。試験の免除については募集要項を確認のこと。

筆記試験科目

	外国語	専門科目
修士課程	英語(TOEFL-ITP)	●漁業資源学 ●水産増養殖学 ●水圏生物利用化学 ●水生動物学 ●水産動物生理学 ●水圏生物環境学 ●水圏生命化学 ●水圏生態学の8科目の中から2科目を選択
博士課程	英語(TOEFLスコア提出)	水圏生物科学に関する小論文



1年次は、講義と演習(ゼミ)に力点をおき、水圏生物科学の基礎知識の習得を目指します。2年次では修士論文研究のためのデータ収集を中心に据え、随時研究室内で中間発表を行い、論文作成の進捗状況を確認します。1月に修士論文を提出し、2月に修士論文発表会が行われます。講義8単位以上、特別講義2単位、演習6単位以上、実験12単位(修士論文)、合計30単位以上を履修し、修士論文審査に合格すると、修士(農学)が授与されます。

修士論文題目の例

- アサリの*Perkinsus*属原虫の感染レベルが愛知県六条潟で低水準である理由の検討
- 魚類骨格筋をモデルとした筋繊維のタイプ特異的な遺伝子の発現調節機構の解析
- 飼育環境下における浮遊性ヤムシ類の生物学的研究
- 東北沿岸域及び太平洋外洋域におけるアナモックス細菌の分布と系統
- 海藻藻場と海草藻場の構造と機能に関する比較生態学的研究
- アミノ酸による魚類の脂質代謝制御に関する研究
- フグ類における性決定遺伝子の機能と進化
- アカウミガメの潜水時間を左右する生理的要因と採餌生態
- ニホンウナギ初期仔魚における味覚・嗅覚関連遺伝子の発現動態解析
- 海洋放線菌*Streptomyces sp.*が生産するsurugamideの生理機能に関する研究
- メダカの神経内分泌系における性差構築と性的可逆性
- エゾハリイカの求愛行動～性的二型形質が発する偏光シグナル～
- シオミズツボワムシ*Brachionus plicatilis*の全ゲノム解析
- 耳石の $\delta^{18}\text{O}$ と海洋同化モデルを用いたマイワシの回遊履歴推定
- 18S rRNAメタバーコーディング解析による黒潮域における渦鞭毛藻の多様性と生物地理



論文や学会を通して最先端の知見を積極的に吸収することで専門知識の充実を図るとともに、実験、調査、データ解析、研究結果の取りまとめを行います。また、学会・シンポジウムにおける研究発表が奨励されるとともに、原著論文の執筆に取り組みます。3月修了予定の場合には、前年12月、9月修了予定の場合には6月に博士論文を提出し、審査を受けます。特別講義2単位、演習6単位、実験12単位を履修し、博士論文審査に合格すると、博士(農学)が授与されます。

博士論文題目の例

- 太平洋における窒素固定の栄養制限に関する研究
- サンゴ礁魚類群集に及ぼすハビタット空間配置の影響
- 培養細胞系アッセイによってカイメンから見いだした新規生物活性物質に関する研究
- メダカの脳におけるメス特異的性ステロイド受容ニューロンの構造・機能解析
- トラフグ脂質代謝制御因子としての成長ホルモンの機能解析
- アサリの摂餌生態と消化機構に関する研究
- 魚類筋肉の発生と成長過程で働くmyomiRとその宿主ミオシン重鎖遺伝子に関する分子生物学的研究
- テトロドトキシンがトラフグの遺伝子発現に及ぼす影響に関する研究
- メダカのトリアシルグリセロールレベル調節におけるリポプロテインリパーゼの機能
- 遺伝子発現解析に基づく浮遊性カイアシ類の環境応答に関する研究
- 環境条件がケンサキイカの生活史特性に与える影響とその個体群変動との関係
- 北西太平洋域におけるウミガメ類の代謝速度に対応した行動様式
- 北太平洋および東部インド洋貧栄養海域における植物プランクトンの成長と摂餌死亡率の動態

2009-2022年度

修士課程(計395名)

博士課程進学	官公庁	民間企業	その他
121名	28名	164名	82名

就職先例:

農林水産省、厚生労働省、文部科学省、水産庁、科学検査研究所、北海道、神奈川県、岩手県、大分県、愛媛県、長崎県、東京都教育庁、北海道国際交流センター、広島県警、新潟大学、東海大学医学部付属病院、東海旅客鉄道、全日本空輸、大和総研、日本総合研究所、オージス総研、電算システム、大塚製薬、田辺三菱製薬、東洋新薬、ロート製薬、JA、宝酒造、白鶴酒造、サッポロビール、キユーピー、東洋水産、ハウス食品、味の素、マルハニチロホールディングス、ミキモト、丸紅、双日、三井物産、出光興産、日本製鋼、楽天、富士通、ゼンショーホールディングス、日本ハム食品、東洋冷蔵、小学館、住友不動産、日本郵船、協和海運、内田洋行、三井倉庫ホールディングス、ニチレイフーズ、日本水産、テレビ朝日、野村総合研究所、NTTデータ

博士課程(計162名)

博士研究員	官公庁	民間企業	大学	その他
67名	17名	17名	18名	43名

就職先例:

水産庁、欧州委員会、水産研究・教育機構、茨城県水産試験場、福島県、長崎県、理化学研究所、海洋政策研究財団、日本学術振興会、東京大学、横浜市立大学、明治大学、明星大学、中国科学院、University of Hawaii、University of the Philippines、Narasuan University、University Malaysia terengganu、Bogor Agricultural University、Central Luzon State University、Bangladesh Agricultural University、高周波熱鍊、ショウエイ、御木本製薬、マルハニチロ食品、三洋テクノマリン、日本水産、JDK株式会社、Phytobiotics

紫水会

旧水産学科から続く卒業生の同窓会です。2023年時点で2268名の会員数を誇ります。その歴史、規模、しっかりとした運営等、東京大学に数ある同窓会の中でも有数のものです。在学中は学生会員、卒業・修了すると正会員となります。例年6月に総会が開かれ、幅広い年代の同窓生が集まり、旧交を温めます。また、学生会員中は紫水会内の基金から、金銭的な援助も受け可能ですが。

研究室紹介

本郷キャンパス

水産資源学研究室

Fisheries Biology

教授 高須賀 明典 准教授 山川 卓 准教授 黒木 真理

水圈生物科学専攻には、東京都文京区の本郷(弥生)キャンパス、静岡県浜松市の浜名湖湖口近くにある農学生命科学研究科附属水産実験所(以下水産実験所)、千葉県柏市の柏キャンパスにある大気海洋研究所に研究室があり、担当教員が所属しています。

本郷キャンパスには基幹講座の水産資源学、魚病学、水圈生物環境学、水族生理学、水産化学、水圈天然物化学、水圈生物工学の7研究室とアジア生物資源環境研究センター沿岸海洋環境学研究室、水産実験所には水産増養殖学研究室があります。

千葉県柏市の大気海洋研究所には協力講座の浮遊生物、微生物、資源生態、資源解析、環境動態、行動生態計測の6グループ(研究室)と、連携講座の海洋無機化学、生物海洋学、資源生態2、生理学、分子海洋生物学の各グループ、および国際・地域連携研究センター国際協力グループ、国際学術グループがあります。

国際・地域連携研究センター大槌研究拠点(大槌沿岸センター)は岩手県大槌町にあります。2011年3月の津波で被災しましたが、2018年に新センターが再建され、所属する教員・スタッフ・学生は大槌で活動を行っています。

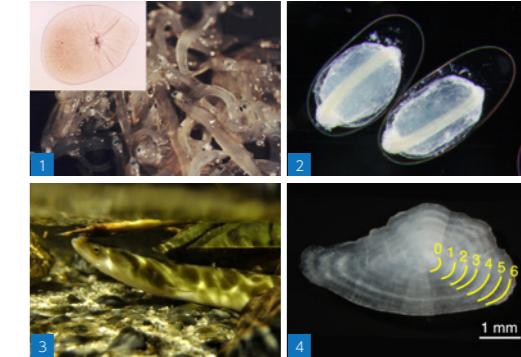


水産資源の持続的利用をめざして

かつて、海は広大で、そこに生息する生物資源は無尽蔵と考えられていました。しかし、世界的な人口増加や人間活動の進展とともに漁業が急速に発展し、海洋の有限性が認識されるに至りました。今日では国連海洋法条約のもとで新たな資源利用秩序が構築され、「責任ある漁業」の推進が世界的に唱えられています。我が国でも漁獲可能量(TAC)制度が施行され、周辺海域の資源評価にいっそうの科学性が求められています。一方、気候・海洋変動に起因するマイワシ資源の大変動にみられるように、地球環境変化とともに水産資源の将来にも大きな関心が持たれています。当研究室は、水産資源の持続的利用をめざして、その科学的基礎となる研究を推進しています。

主な研究テーマ

- 魚類の生活史戦略
- 耳石分析による成長・生残・回遊履歴等の解析
- 水圏生物群集・生態系の構造および動態
- 資源評価・資源管理手法



①カタクチイワシの仔魚と耳石 ②カタクチイワシの卵 ③ニホンウナギ ④アメマスの耳石

研究室HP <http://katsuo.fs.a-u-tokyo.ac.jp/>

本郷キャンパス

魚病学研究室

Aquatic Animal Health Research

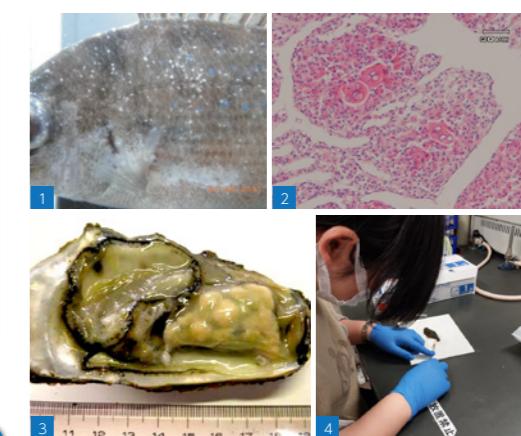
教授 伊藤 直樹 助教 渡邊 勇歩

魚介類の感染症に挑む

水生動物にも陸上動物と同じように様々な感染症があり、養殖産業に大きな被害をもたらしています。また最近では、野生生物に蔓延することで漁業資源と生態系へ悪影響を及ぼす疾病や、ヒトに食中毒を起こす寄生虫が社会的に注目を集めるなど深刻な問題も発生しています。これらの問題に対して、「魚介類の感染症とどのように闘うか?」という意識をもちつつ、野外調査、形態観察、感染実験、細胞培養、分類学、分子生物学等の手法を用い、病原生物と魚介類の両方の観点から研究を行っています。さらに、国外からの病原体侵入により水産業がダメージを受けることも予想されるため、社会学的な手法を用いた調査を実施するとともに防疫制度改善のため活動にも取り組んでいます。

主な研究テーマ

- 魚介類の病原体の生物学と病理学
- 魚介類における感染症の発生メカニズム・病原因子および防除
- 感染症が天然資源に及ぼす影響の評価と対策
- 薬剤療法・ワクチンの開発



①海産白点病に罹患したマダイ ②Perkinsus olseniが感染したアサリの鳃 ③マガキの卵巣肥大症 ④試作ワクチンの有効性評価

研究室HP <http://fishparasite.fs.a-u-tokyo.ac.jp/LFD/home.html>

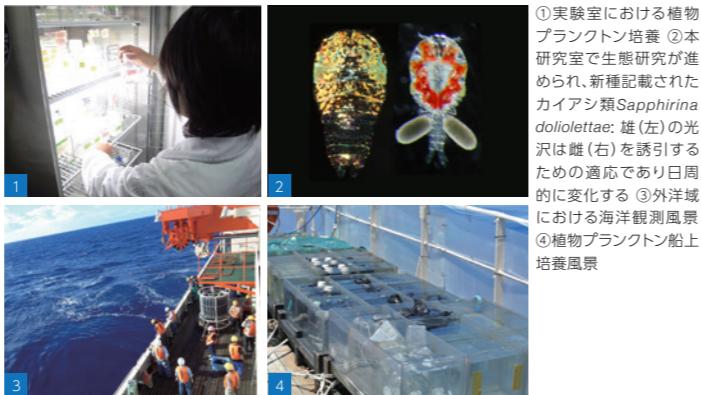


環境から海洋生態系の謎に挑む

地球上では様々な物質が循環して地球環境を形成しています。生物は炭素や窒素などの親生物元素の循環を加速しながら有機物を生産・消費し、一方で有害物質を蓄積・分解しています。人類の生存はこのような生物活動でもたらされる安定な環境と食糧供給に依存していますが、人為的な環境変化が顕在化し、生物の活動に重大な影響が現れるようになってきました。本研究室では、室内実験とフィールドワークを通じて水圏の環境特性を把握し、プランクトンを中心とした海洋生物の分類や生態、環境適応などの生物特性を解明して、物質循環の理解を深め、それをもとに水圏環境の保全をはかることを目指しています。

主な研究テーマ

- 海洋の環境収容力と環境保全の研究
- 海洋生物生産過程の研究
- プランクトンの分類と生態の研究
- 海洋における生物地球化学的な物質循環の研究



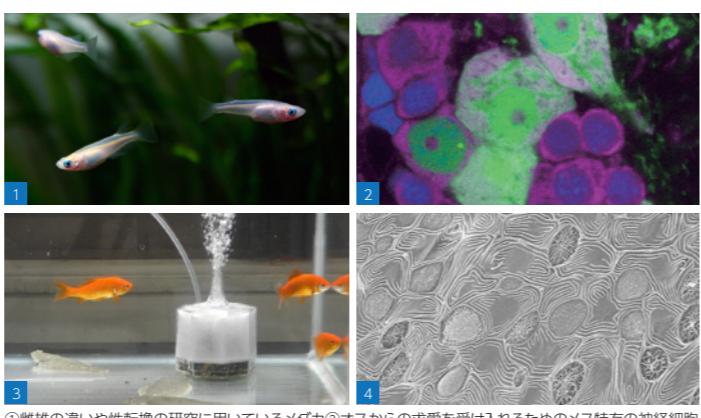
研究室HP <http://fol.fs.a.u-tokyo.ac.jp/>

魚類の生理機能や行動を規定するメカニズムを解き明かす

魚類は我々ヒトと同じ脊椎動物に属し、基本的な体のつくりや機能はヒトと共通しています。その一方、性転換や回遊など、ヒトにはみられないユニークな生理機能や行動も示します。魚類が示すこれらの生理機能や行動を規定するメカニズムを明らかにすることは、我々の知的好奇心を大いに満たしてくれるだけでなく、効率的な増養殖や水産資源の持続的利用・高度利用に資するところも少なくありません。なぜ魚類は性別を簡単に変えることができるのか。そのとき、脳内では何が起きているのか。そもそも雌雄の違いはどのように形成されるのか。魚類は淡水域から海洋まで多様な環境にどのように適応しているのか。本研究室では、こうした疑問に答えるための研究を進めています。

主な研究テーマ

- 生理機能や行動に雌雄の違いを生み出す脳内メカニズムの解明
- 性転換を可能にする脳内メカニズムの解明
- 淡水環境・海水環境への適応メカニズムの解明
- 浸透圧調節メカニズムとその養殖技術への応用



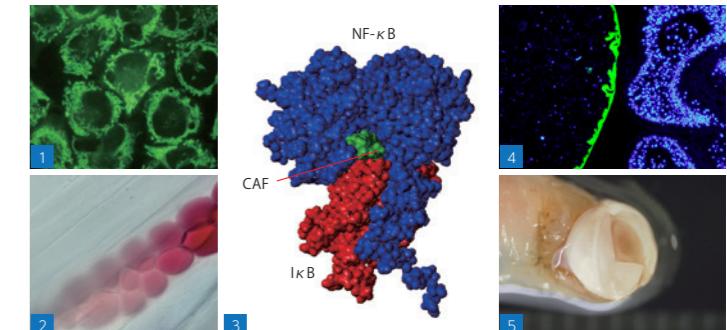
研究室HP <https://suizokuseiri-utokyo.jp/>

水生生物をとことんまで利用する

魚貝類は食資源として利用されている生物種に限っても陸上生物を遙かに凌いでいます。しかしながら、その資源は有限であり、無駄にすることはできません。その多岐にわたった生物たちが進化の過程で獲得してきた生物学的戦略を、生化学的、分子生物学的、生理学的、物理化学的、情報生物学的な手法を駆使して紐解きながら、それらができる限り有効に利用していくことが水産化学研究室の目指すゴールです。研究対象とする生物種は微生物から哺乳類にまでわたり、その成果は、基礎科学の発展だけでなく、食品、エネルギー、環境分野に広がり、ヒトの健康やQOL向上にも生かされるなど、しっかりと社会に還元されています。

主な研究テーマ

- 細胞内および細胞間情報伝達機構
- エネルギー代謝制御機構
- ストレス応答の生物学
- 水産食品の品質向上と安全の確保(毒、アレルギーなど)
- 魚類の生物学・生化学的特性の理解と応用的展開



研究室HP <http://mbl.fs.a.u-tokyo.ac.jp/>

水圏生物が作るユニークな化合物を探し出し、それを活用する

生体の構成成分には、種を越えて共通の成分(タンパク質、脂質、糖質、核酸などの一次代謝産物)と、それらとは化学構造が全く異なる特殊成分(二次代謝産物)があり、医薬品の多くは二次代謝産物に由来します。天然物化学は、二次代謝産物についての研究を行う学問分野で、歴史的には、身近な植物を対象として始められ、土壤中の微生物さらには海洋生物や微細藻に及んでいます。当研究室の研究の目標は、水圏生物に含まれる二次代謝産物を有効に活用し、人類の福祉の向上に資することで、具体的な研究内容は、有用物質の発見、構造決定、有用性の検証および生産機構の解析です。困難な研究テーマに挑むことを通して構成員の人格を鍛錬することが、研究室の目標です。

主な研究テーマ

- 海洋由来の微生物から抗がん剤などの有用物質を探索する
- 微細藻類由来バイオ燃料の生産機構を解明する
- 水圏生物のユニークな生合成酵素を探索する
- カビによる鰹節発酵に関する研究



研究室HP <http://anpc.fs.a.u-tokyo.ac.jp/>

水圈生物工学研究室

Aquatic Molecular Biology and Biotechnology

本郷キャンパス

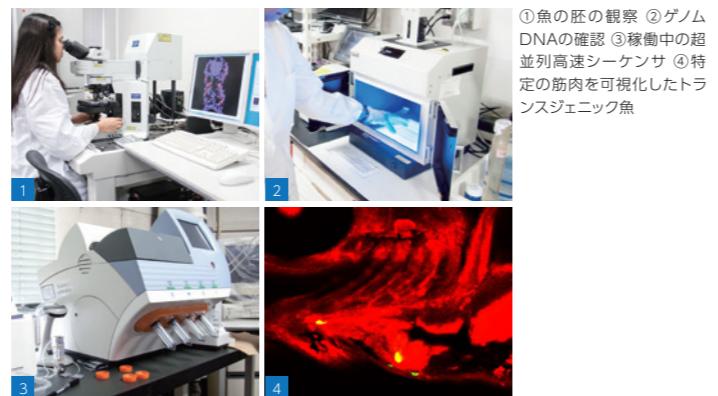
教授 浅川 修一 準教授 木下 滋晴

ゲノム情報の海を航海し、地球の海から収穫する

多様な水圈生物が人類にもたらしている恩恵は膨大で、さらなる利用可能性も計り知れません。しかし陸上生物である人類にとって水圈へのアクセスは容易ではありません。そのため我々に馴染みのある魚介類に関してですら、その特性に関する知識は限られています。水圈生物から受ける恩恵を維持し発展させるには各水圈生物の特性把握が必要です。特性は多岐に渡りますが、それらの中に遺伝情報が加われば、対象生物の有用性は格段に高まります。当研究室では、様々な水圈生物のゲノム情報を解読し、そこから得られた情報を水産分野はもちろん、環境、医学、エネルギー、行動、健康、長寿など多岐にわたる分野の発展に活用することを目指しています。

主な研究テーマ

- ゲノムの大規模解析とそれに基づく優良遺伝子の探索、集団動態の解明、行動学的解析
- メタゲノム解析や微分ゲノム解析による海洋環境評価や選択圧の解明に関する研究
- 水圈生物機能性RNAや魚類抗体を用いた分子標的薬の創出
- 水圈生物から探る老化・寿命の多様性に関する研究



研究室HP <http://www.suikou.fs.a.u-tokyo.ac.jp/>

アジア生物資源環境研究センター

沿岸海洋環境学研究室

Asian Research Center for Bioresource and Environmental Sciences

本郷キャンパス

准教授 岩瀧 光儀

有害微細藻類の形態、系統、生態、分布を理解して被害対策に貢献する

沿岸域では微細藻類を原因とする有害赤潮や魚介類毒化などの問題が起きています。本研究室では、これら有害藻類に関する問題が頻発している東南アジアを主なフィールドとして、渦鞭毛藻類を中心とした有害微細藻類の形態、系統、生態、分布に関する研究を現地研究者と連携しながら進めています。現地で採集した微細藻類を研究室で培養し、走査型・透過型電子顕微鏡を用いた細胞の微細構造観察と分子系統解析を行うことで、微細構造の違いと系統的位置に基づく系統分類研究を行っています。有害藻類を種や種内系統群レベルで識別し、特に東南アジアにおける分布を明らかにしています。

主な研究テーマ

- 微細藻類の系統分類
- 有害藻類の生態と分布
- 渦鞭毛藻の進化
- 東南アジアにおける有害藻類対策



研究室HP <https://www.anesc.u-tokyo.ac.jp>

水産増養殖学研究室

Applied Marine Biology (Fisheries Laboratory)

水産実験所

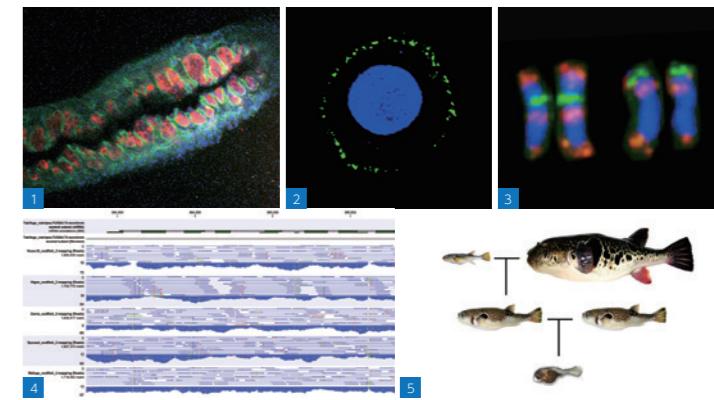
教授 菊池 潔 助教 細谷 将 助教 平瀬 祥太郎

海洋生物のゲノムワイド分子遺伝学

水産実験所では様々な研究がおこなわれていますが、特に力をいれているのが海洋生物のゲノムワイド分子遺伝学です。多くの海洋生物が実際に魅力的な生命現象を示しますが、その材料育成の困難さから遺伝学的解析が阻まれていました。本実験所は海に近いという立地条件を最大限に活かしつつ、先端的な分子遺伝学的手法を用いることにより、海洋生物の生命現象を遺伝子レベルで解き明かすことに挑戦しています。その成果の一端は、新しい性決定遺伝子の発見(2012・2019年公表)という研究を見てとれます。さらに現在は、種分化といったマクロな現象も視野に入れて、海洋生物の進化基盤の理解とその知識の実学的利用法開発を目指しています。

主な研究テーマ

- 魚類性決定遺伝子の研究
- 魚類の生体防御機構と病原体との相互作用に関する研究
- 適応進化や種分化の遺伝基盤解明
- ゲノム情報を用いた迅速育種法の開発
- 野生集団の遺伝的多様性に関する研究



研究室HP <http://www.se.a.u-tokyo.ac.jp/japanese.html>

大気海洋研究所

浮遊生物グループ

Marine Planktology

准教授 西部 裕一郎

准教授 高木 悠花

講師 平井 悅也

教授 齊藤 宏明

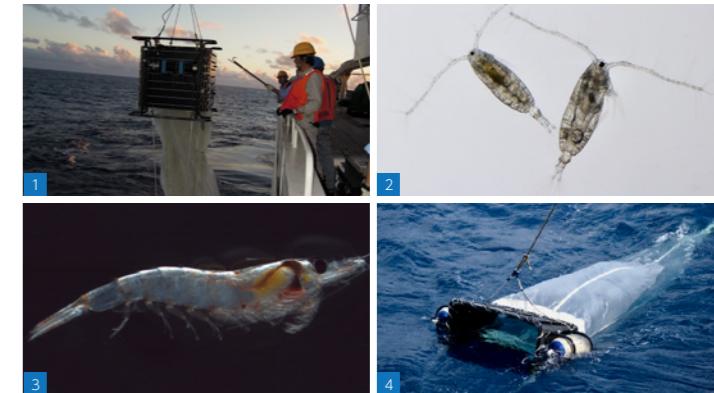
(国際協力グループ)

ミクロのプランクトンを調べ海と地球の変動を知る

プランクトン(浮遊生物)は熱帯から極域、表層から超深海まであらゆる海洋環境に生息しています。そこでは、1 μmに満たない微細な藻類から数 mに達するクラゲの仲間まで、多種多様な生物が相互に関係を持ちながら独自の生活を送っています。浮遊生物グループでは、沿岸域から外洋域まで様々な環境をフィールドとし、プランクトンの群集構造や生活史、摂餌生態などを調べることで、海洋の食物網や物質循環における役割の解明を目指しています。また、地球温暖化や人為的な環境汚染に対する低次生態系の応答に関する研究にも取り組んでおり、特に海洋プラスチックの研究を積極的に進めています。

主な研究テーマ

- 動物プランクトンの休眠と環境適応
- 海洋におけるマイクロプラスチックの動態と低次生態系への影響
- 遺伝子解析による動物プランクトンの多様性解析・食物網の再構築
- 動物プランクトンに感染するウイルスの多様性と生態系における役割の解明



研究室HP <http://www.ecosystem.aori.u-tokyo.ac.jp/plankton/>

①閉開式ネットによる動物プランクトン採集 ②休眠卵を産む沿岸性カイアシ類 ③オキアミ類
④ニューストンネットを用いたマイクロプラスチックの採集

微生物グループ

Marine Microbiology

大気海洋研究所

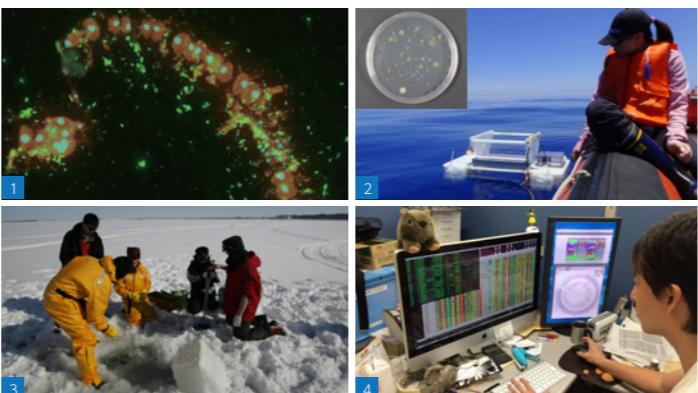
教授 濱崎 恒二 准教授 塩崎 拓平 助教 西村 昌彦

スプーン1杯の海水から探る地球環境

海洋微生物(ウイルス、細菌、原生生物)は、自然環境の持続性、地球規模の環境変動、人の健康といった問題に深く関わり、また未知の遺伝子資源としての可能性をもっています。本研究室では、海洋微生物の生理生態学的機能とそれらが地球環境の維持に果たす役割を明らかにすることを目指しています。海洋に生息する微生物の進化と多様化のメカニズム、微生物の多様性と環境との相互作用、物質循環や生態系維持に寄与する微生物代謝機能といった点に主眼を置き、基礎、応用の両面から幅広く研究を行っています。また、大型研究船による航海や臨海実験施設等での野外調査によって、国内外の様々な海域で試料採取や調査活動を行っています。

主な研究テーマ

- 海洋微生物群集の多様性や環境応答に関する研究
- 北極海・南極海における微生物生態に関する研究
- 炭素・窒素・硫黄循環と微生物機能に関する研究
- メタゲノム・メタトランスクリプトーム解析による環境評価に関する研究



研究室HP <http://www.ecosystem.aori.u-tokyo.ac.jp/microbiology/>

資源解析グループ

Fish Population Dynamics

大気海洋研究所
教授 森田 健太郎 助教 入江 貴博

水圏生物資源の進化生態と保全管理

資源解析グループでは、水圏生物の個体群を対象に、野外調査と数理モデルを併用した生活史進化や繁殖生態に関する論理実証的な研究を展開しています。人為的な影響によって、多くの水圏生物が絶滅の危機に瀕していますが、私たちは貴重な水圏生物と自然を次世代に残すために、生物資源の管理と保全に関する研究を進めています。また、個体群の動態は、個体群を構成する個体のふるまいによって決まるため、生活史の個体変異に関する研究も進めています。これは、様々な地理的スケールで変化する環境条件の下で、それぞれの個体群がみせる表現型の多様性を進化生態学的な見地から統合的に理解することを目指した取り組みです。

主な研究テーマ

- 生物資源の管理と保全
- 水圏生物の進化生態
- 水圏生物の生活史の種内変異
- 水圏生物の個体数変動



研究室HP <http://cod.aori.u-tokyo.ac.jp/>

資源生態グループ

Biology of Fisheries Resources

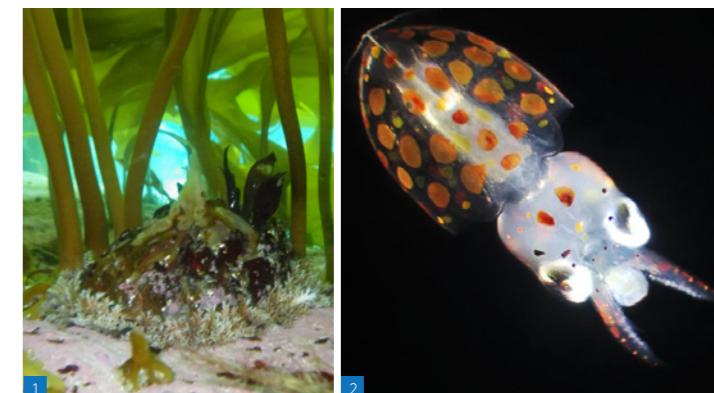
大気海洋研究所
教授 河村 知彦 准教授 岩田 容子 准教授 早川 淳 助教 猿渡 敏郎

海洋動物の生活史戦略から個体群変動のしくみに迫る

海洋動物は一般に、陸上動物に比べて非常に多くの卵を産みます。しかし、新たに資源として加入するのはごくわずかに生き残った個体のみです。資源への加入量は、海洋環境の変化に伴う産卵数や産卵期、生活史初期の死亡率などの変化に大きく影響を受けます。当研究室では、資源生物の個体群変動要因を明らかにすることを目的とし、海洋動物の生態がそれぞれの生息環境にどのように適応しているか、それが海洋環境の変動に対してどのように応答するのかを、三陸沿岸や奄美群島を含めた各地でのフィールド調査や飼育実験など、様々な手法を用いて研究しています。また、資源生物を取り巻く生物群集構造や種間関係などを解明するための研究にも取り組んでいます。

主な研究テーマ

- 海洋動物の初期生態、繁殖生態
- 海洋動物の生活史、個体発生、個体群動態
- 海洋動物の資源量変動メカニズム
- 資源生物を取り巻く生物群集構造、食物網構造、種間関係



研究室HP <http://www.shigenseitai.aori.u-tokyo.ac.jp/>

環境動態グループ

Fisheries Environmental Oceanography

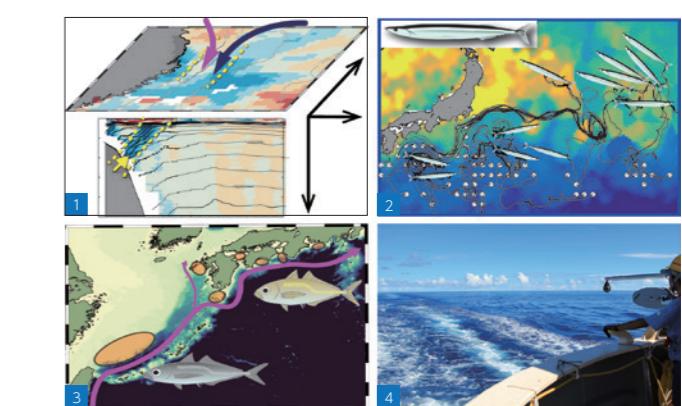
大気海洋研究所
教授 伊藤 進一 准教授 小松 幸生 准教授 伊藤 幸彦
助教 松村 義正 特任助教 干場 康博 特任助教 横口 富彦

海洋環境変動が海洋生態系に与える影響を解き明かす

海洋は、魚・貝類や海藻など多くの恵みを育み、人類の生活を支えています。これらの海洋生物資源は、地球規模の海洋環境変動と強く結びついて変動していることがわかってきました。しかし、多くの海洋生物の生活史(例えば魚類では産卵場所や時期そして回遊経路など)は未だ未解明な部分が多く、どのようなメカニズムを通して海洋環境変動が海洋生態系に影響を与えているのかは多くの謎に包まれています。地球温暖化という環境問題に直面した人類にとって、海洋環境変動が海洋生態系に影響を与える仕組みを解明し、将来の影響評価をすることが重要な課題となっています。現場観測研究、室内実験、精密分析、数値モデルリングからこの課題に取り組んでいます。

主な研究テーマ

- 地球温暖化が海洋生態系および海洋生物資源に与える影響評価
- 海洋環境が魚類の成長・回遊・生残に与える影響のモデリング
- 潮目・潮境の物理構造と栄養塩輸送過程
- プランクトン生産・多様性モデリング



研究室HP <http://lmr.aori.u-tokyo.ac.jp/feog/FODjap.html>

11 12

行動生態計測グループ

Behavior, Ecology and Observation Systems

大気海洋研究所

教授 佐藤 克文 準教授 坂本 健太郎

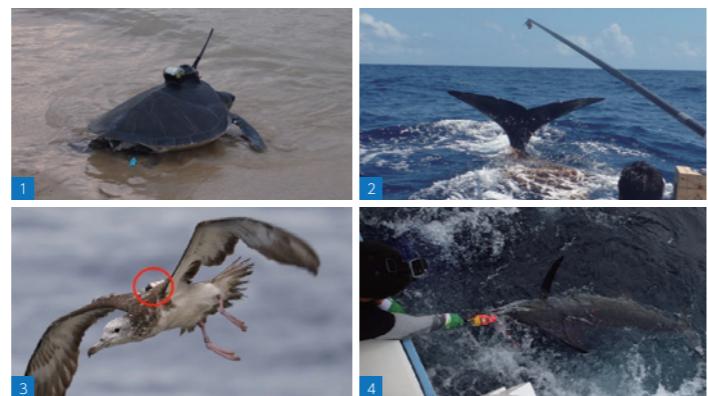
動物の行動生態および海洋環境の計測法を探求する

採餌や繁殖に適した環境を求めて動物は移動しますが、いかに振る舞うのが効率的なのでしょうか？効率の良い移動のために、それぞれの種はどのような形態的特徴を有しているのでしょうか？海洋生物資源を持続的に利用するには、生態系を構成する哺乳類・鳥類・爬虫類・魚類といった高次捕食動物の生態、行動、機能を深く理解する必要があります。そのための生物学的基礎を広く海に求めること、およびそれらの計測方法を開発することが当研究室の目標です。具体的にはバイオロギングを用いた現場における水生動物の行動測定、流水水槽を用いた魚類のエネルギー消費量測定、現場生態調査、遺伝子解析による生物資源の生態解析を行っています。

主な研究テーマ

- 動物行動の種間比較
- 海洋動物の生活史解明
- 動物行動のバイオメカニクス
- 動物の行動及びそれを取り巻く環境の計測手法開発

研究室HP <http://www.fishecol.aori.u-tokyo.ac.jp/>



①人工衛星対応型発信器をのせて海に入るアオウミガメ ②行動記録計が取り付けられたあと潜り始めるマッコウクジラ ③行動記録計を搭載したオオミズナギドリ ④吻に行動記録計を付けられたマカジキ

海洋無機化学グループ

Marine Inorganic Chemistry

大気海洋研究所

教授 小畠 元

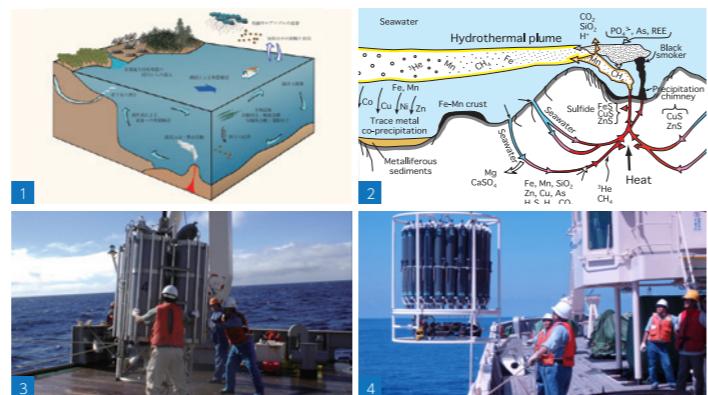
海洋の化学的成り立ちと大気圏－生物圏－地殻圏との相互作用の解明

海洋無機化学グループでは、地球化学的手法を用いて生物が生存する海洋環境の現在・過去・未来を解明することを目指し、大気－海洋－岩石圏にまたがる研究を推進しています。観測船などを活用し、世界最先端の分析技術を使って海洋環境における溶存気体成分、微量元素の濃度およびその同位体組成の詳細な時空間分布を明らかにします。現在は国際GEOTRACES計画(海洋の微量元素・同位体による生物地球化学研究)に参加してグローバルな観測を行い、国際的な協力体制の下、海洋における生物地球化学的サイクル解明という課題に取り組んでいます。

主な研究テーマ

- 海洋における溶存気体成分の挙動と生物地球化学サイクル
- 微量必須栄養塩としての微量元素の動態
- 海水中の微量元素の存在状態と生物利用性
- 天然放射性核種を使った炭素循環研究
- 海底熱水活動により放出される還元化学種とその生物への影響

研究室HP <http://co.aori.u-tokyo.ac.jp/mic/>



①海洋の生物地球化学的サイクルの概念図 ②熱水活動によって変動する化学成分の模式図 ③学術研究船白鳳丸における大量採水器による採水 ④学術研究船白鳳丸におけるクリーン採水

生理学グループ

Physiology of Marine Organisms

大気海洋研究所

教授 兵藤 晋 助教 黄 國成

サメ類など魚類が海洋環境に適応するメカニズムとその進化に迫る

多様な海洋環境に生命はどのように適応し、進化してきたのか、特に魚類に注目して研究を進めています。軟骨魚類(サメ・エイ・ギンザメ)を中心に、無脊椎動物と類似の戦略をとる円口類のヌタウナギ、真骨魚については遺伝学的な解析が可能なメダカをモデルに、研究室での飼育実験に加えて国内外のフィールド調査や水族館との相互協力のもと、研究を進めています。分子レベルの解析から系統分類・生態学的観点までを含めた、包括的な生理学研究を目指しています。また、近年の環境変動にともない魚類を中心とした海洋生物の分布の変動を明らかにする「オーシャンDNAプロジェクト」も進めています。

主な研究テーマ

- 魚類が海洋環境に適応するしくみの解明
- 卵生から胎生までの軟骨魚類の多様な繁殖戦略
- 広塩性オオメジロザメの生理生態学
- 海洋生物の分布と変動を明らかにするオーシャンDNAプロジェクト

研究室HP <http://physiol.aori.u-tokyo.ac.jp/seiri/>



①河川に遡上する広塩性のオオメジロザメ ②軟骨魚類で初めてゲノム解析が行われたゾウギンザメ
③発生中のゾウギンザメ胚 ④順応型の体液調節を行うヌタウナギ

大気海洋研究所

教授 井上 広滋 準教授 井上 潤

分子海洋生物学グループ

Molecular Marine Biology

水圏生物の進化とその生態を支える分子機構

本研究室では、深海の熱水噴出域、河口域、サンゴ礁など様々な環境に棲む無脊椎動物や魚類を主な研究対象として、それぞれの生物の進化と系統関係、生息場所や生態的地位および微生物との共生などに関わる分子機能について、分子生物学的手法やゲノム科学的手法による解明を目指しています。また、これらの研究成果を踏まえて、生物を指標とする環境汚染の解析や、水圏生態系の遺伝的多様性保全の研究にも取り組んでいます。

主な研究テーマ

- 深海熱水噴出域や河口域に棲むための機能とその進化
- 付着性生物の付着や移動のメカニズム
- 海産無脊椎動物と微生物との共生機構
- 生物の環境適応機能の利用による環境・生態系保全
- 水圏生物の進化と系統関係

研究室HP <http://darwin.aori.u-tokyo.ac.jp/>



①深海の熱水噴出域の優占種シチヨウシンカイヒラガイ
②東南アジアの汽水域に広く生息するジャワメダカ ③ムラサキイガイの付着 ④サンゴの白化

地球環境変動に伴う生物の応答メカニズムの解明

海洋観測、野外調査、数値シミュレーション、飼育実験、同位体比分析から、ウナギ目やマグロ属などの大規模回遊魚、イワシ類などの多獲性浮魚類およびヒラメなどの沿岸性魚類を対象とした初期生活史・回遊生態に関する研究を、エルニーニョ、レジームシフト、温暖化などに焦点を当てて進めています。また、ニホンウナギが成熟するまでの河川淡水域での行動生態に関して、採集調査やバイオテレメトリーなどから研究を進める一方、ダムや護岸、堰などの人工構造物が成長・生残に与える影響や放流事業を評価する研究を展開しています。さらに、海洋保護区(MPA)や海洋生態系の連関性(connectivity)、海洋空間計画(MSP)とも関連させながら、アワビやムール貝などの底生生物を対象とした沿岸生態系モデルに関する研究も行っています。

主な研究テーマ

- 流動が水産生物の資源変動・回遊行動に与える影響
- 沿岸域・汽水域に生息する水産生物の再生産機構
- 人工構造物が河川生活期の魚類の行動生態に与える影響
- 地球環境変動に伴う水産生物の応答過程

研究室HP <http://mbe.aori.u-tokyo.ac.jp>



資源生態2グループ

Biology of Fisheries Resources 2

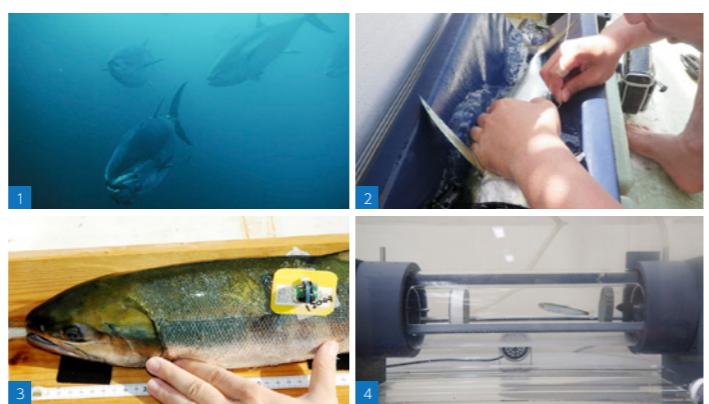
大回遊する魚類の行動生理生態学の展開

海洋を大回遊する魚は高度回遊性魚類と呼ばれ、排他的経済水域を越えて分布します。対象とする魚種の適正な国際資源管理のために、回遊生態を詳細に把握することが重要です。当研究室では、高次魚類(マグロ族やサケ属)の回遊や行動および生息環境をバイオロギングなどで計測して把握し、行動要因の解明やそれに基づく将来分布の予測などを行っています。特に、個体の行動を環境(変化)に対する個体の内的(生理)状態を介した応答として捉え、技術開発を含む多様な手法を用いて研究を進めています。地域創生とともに住民の地域アイデンティ構築の一助となる海洋研究も積極的に行っていきます。

主な研究テーマ

- 高度回遊性種を中心とした魚類の行動生態学的研究
- 魚類の体温・代謝生理学的研究
- バイオロギングを中心とした計測・解析技術の開発
- 地域創生に関わる文理融合的海洋研究の展開

研究室HP <https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/people/people001695.html>



①生簀内を遊泳するクロマグロ ②キハダへのデータロガー装着の様子 ③データロガーを装着したサケ稚魚 ④スタミナトンネルによるサケ稚魚の代謝測定

国際協力グループ

Center for International and Local Research Cooperation
International Research Cooperation

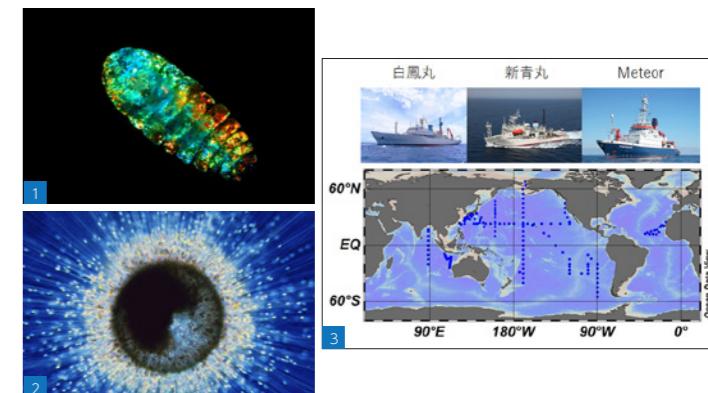
プランクトンの生態と機能的多様性の探求による海洋変動機構の解明

プランクトンは、有機物を合成して海洋生態系の基盤を形作ると共に、魚など大型生物の餌となることで漁業生産を支えています。同時に、炭素、窒素、リン等生元素の化学的性質や粒状物の大きさを変えることで、地球全体の生元素循環を制御しています。プランクトンが海洋食物網動態および地球生物化学循環に果たす役割に関して研究を行うとともに、国内外の大学・研究機関と協力し、人間社会の基盤となっている海洋生態系サービスを持続的に利用するための方策を探っています。浮遊生物グループと合同で研究・ゼミを行っています。

主な研究テーマ

- 黒潮生態系の食物網と漁業生産の変動メカニズム
- 超貧栄養亜熱帯域の窒素・リン循環に果たすプランクトンの役割
- 光共生有孔虫の生態と進化
- 藍藻Prochlorococcusの生理・生態と多様性

研究室HP <https://www.aori-saitolaboratory.com/>



①カイアシ類Sapphirina gemma ②光共生放散虫と共生藻
③近年の観測点と使用した調査船

国際学術グループ

Center for International and Local Research Cooperation
International Advanced Research

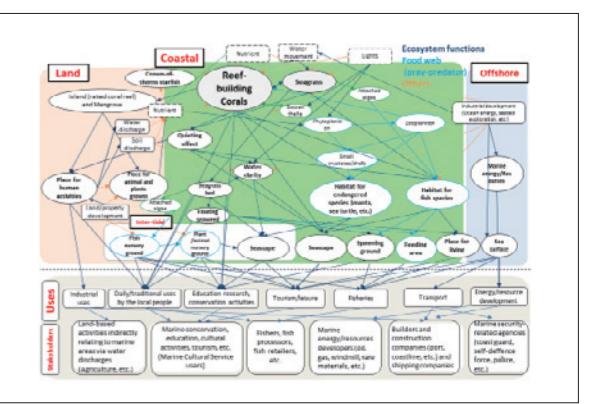
海の恵みの持続可能な利用に関する文理融合研究

日本の周辺海域は、多様な生態系に恵まれ、各地で多様な文化がはぐくられてきました。本グループでは、こうした生態系と社会系の相互作用に着目し、海の利用と保全の調和にむけた方策を研究するとともに、その理解をアジア太平洋および全世界に一般化して、世界の人と海の持続可能な関係を考察します。また、持続可能な開発目標(SDGs)や国連海洋科学の10年などにおける国際文理融合研究の推進にも貢献します。

主な研究テーマ

- 水産資源管理
- 沿岸生態系保全
- 国際文理融合研究の企画・運営
- アジア太平洋・アフリカ諸国との連携・協力

研究室HP <https://makinolab.aori.u-tokyo.ac.jp/>



沿岸生態系の構造・機能と人による利用・利害関係の相互作用(石西礁湖の場合)

教員一覧

研究室	職名	氏名	ホームページ
本郷キャンパス	教授	高須賀 明典	
	准教授	山川 卓	http://katsuo.fs.a.u-tokyo.ac.jp/
	准教授	黒木 真理	
	教授	伊藤 直樹	
	助教	渡邊 勇歩	http://fishparasite.fs.a.u-tokyo.ac.jp/LFD/home.html
	教授	高橋 一生	
	准教授	児玉 武稔	http://fol.fs.a.u-tokyo.ac.jp/
	教授	大久保 範聰	
	助教	井ノ口 蘭	https://suizokuseiri-utokyo.jp/
	教授	潮 秀樹	
	准教授	渡邊 壮一	
	助教	小南 友里	
	連携教授	山下 優明	
大気海洋研究所	教授	岡田 茂	http://anpc.fs.a.u-tokyo.ac.jp/
	助教	二宮 章洋	
	教授	浅川 修一	
	准教授	木下 滋晴	http://www.suikou.fs.a.u-tokyo.ac.jp/
	准教授	岩瀧 光儀	https://www.anesc.u-tokyo.ac.jp
	教授	菊池 潔	
	助教	細谷 将	
	助教	平瀬 祥太郎	http://www.se.a.u-tokyo.ac.jp/japanese.html
	准教授	西部 裕一郎	
	准教授	高木 悠花	
	講師	平井 憲也	http://www.ecosystem.aori.u-tokyo.ac.jp/plankton/
	教授	齊藤 宏明(国際協力グループ)	
浮遊生物グループ	教授	濱崎 恒二	
	准教授	塩崎 拓平	http://ecosystem.aori.u-tokyo.ac.jp/microbiology-wp/
	助教	西村 昌彦	
	教授	森田 健太郎	
	助教	入江 貴博	http://cod.aori.u-tokyo.ac.jp/
	教授	河村 知彦	
	准教授	岩田 容子	
	准教授	早川 淳	http://www.shigenseitai.aori.u-tokyo.ac.jp/
	助教	猿渡 敏郎	
	教授	伊藤 進一	
	准教授	小松 幸生	
	准教授	伊藤 幸彦	
分子生物学グループ	助教	松村 義正	http://lmr.aori.u-tokyo.ac.jp/feog/FODjap.html
	特任助教	干場 康博	
	特任助教	樋口 富彦	
	教授	佐藤 克文	http://www.fishecol.aori.u-tokyo.ac.jp/
	准教授	坂本 健太郎	
	教授	小畠 元	http://co.aori.u-tokyo.ac.jp/mic/
	教授	兵藤 晋	http://physiol.aori.u-tokyo.ac.jp/seiri/
	助教	黄 國成	
	教授	井上 広滋	http://darwin.aori.u-tokyo.ac.jp/
	准教授	井上 潤	
	教授	木村 伸吾	http://mbe.aori.u-tokyo.ac.jp/
	教授	北川 貴士	https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/people/people001695.html
国際協力グループ	教授	齊藤 宏明	https://www.aori-saitolaboratory.com/
	教授	牧野 光琢	https://makinolab.aori.u-tokyo.ac.jp/

